

あめのこやみ

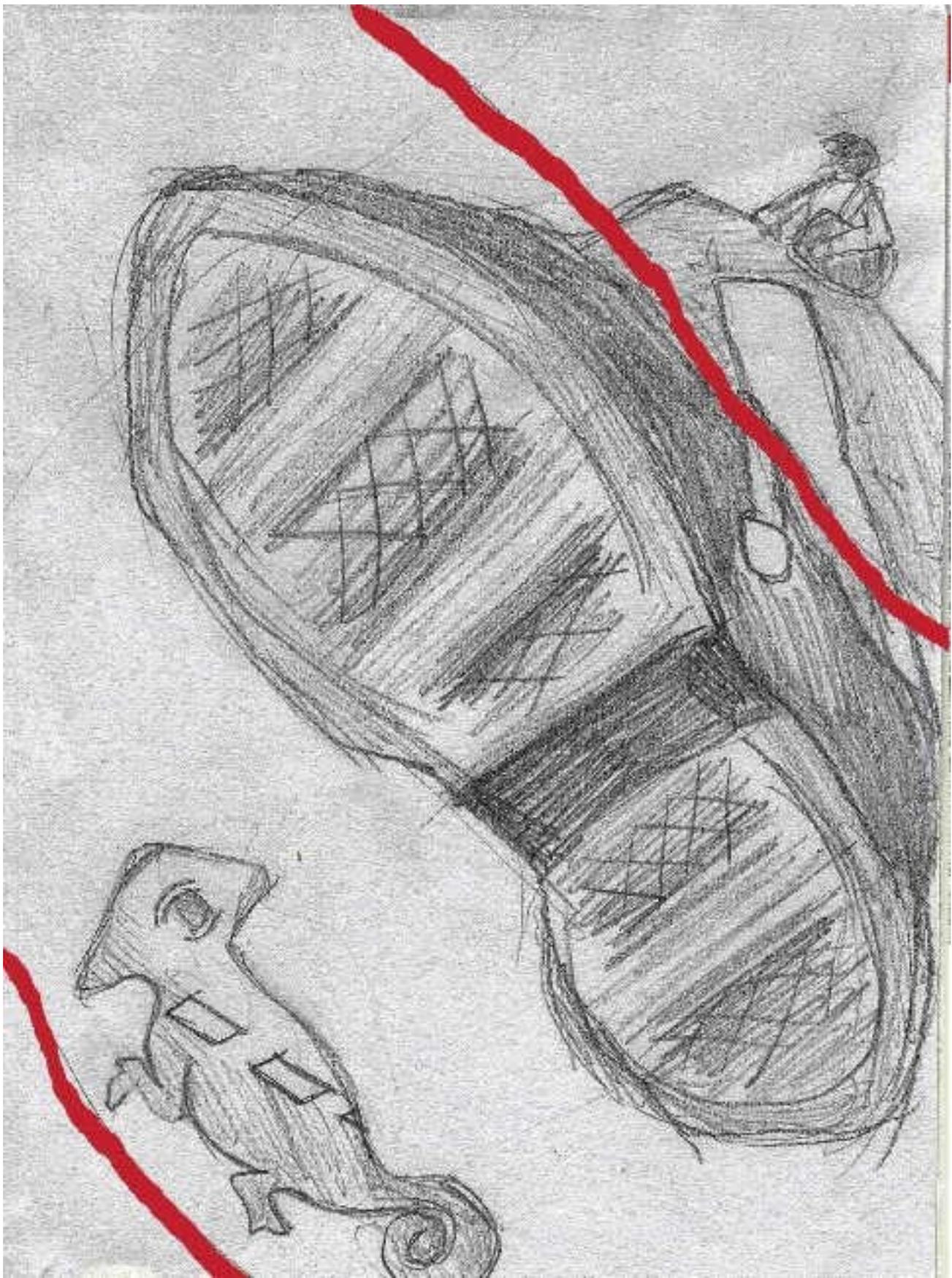


# 離島の墓

あめのこやみ

君はカメレオンだから  
教室と同じ色をしている  
チリ毛でつぶすのが大嫌いな僕は  
知らずにつぶしてしまうよ

たとえ君の足跡見つけたって  
僕は上向いたフリしてつぶしてしまうから  
同じレールの上  
歩かない方がいいよ



君はこんなメンヘラで病んでて  
死んだ様に生きてる僕と  
友達になりたいって言ってくれたけど  
それはどういう意味なのか

口から出まかせでも ありがとう

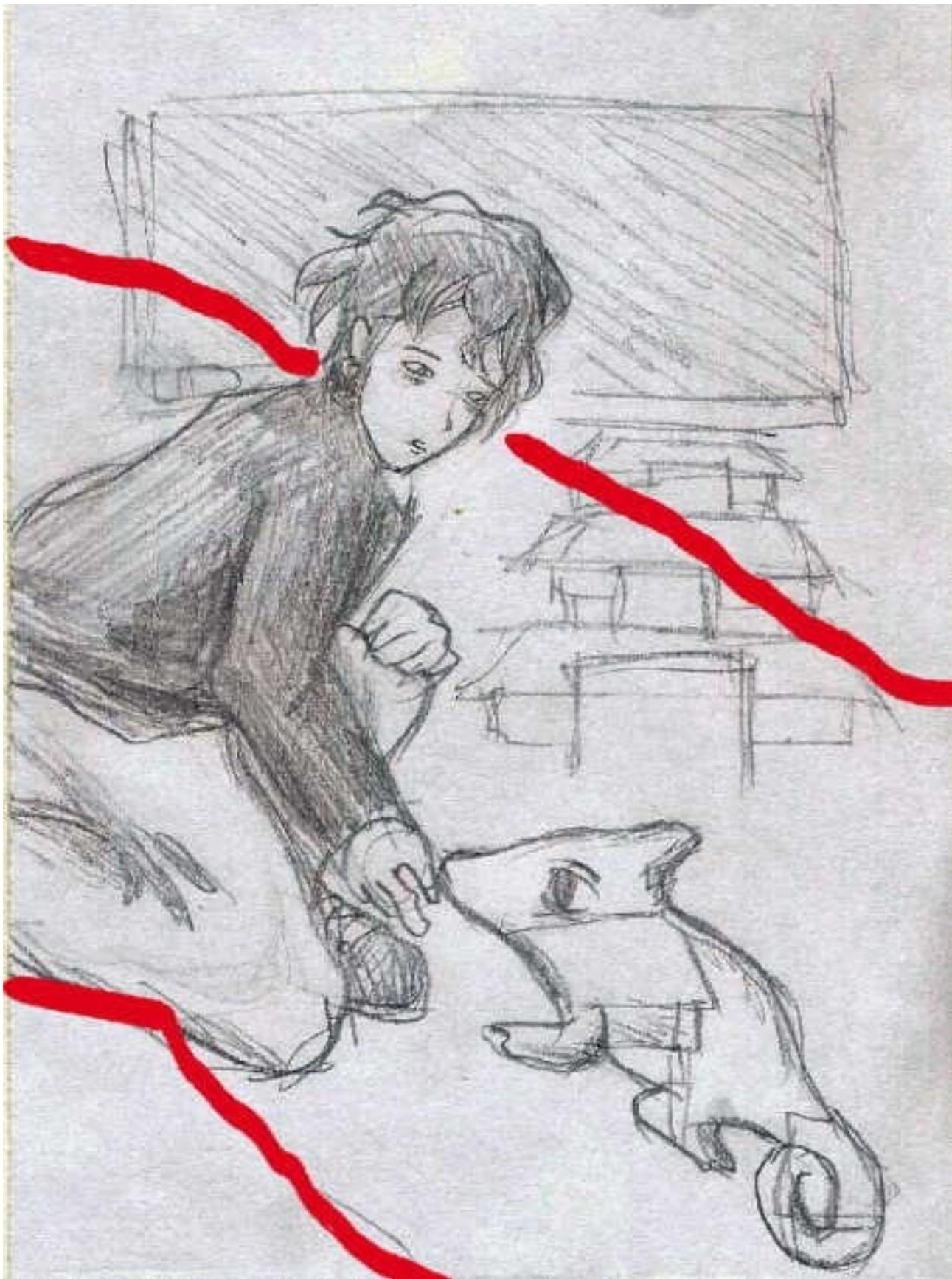


僕は明らかに社交性がなくて  
人を疑って疑いまくって  
離島の山奥にひっそりと立つ  
墓みたいにひとりで生きていた



同じレールの上歩かない方がいいぜ  
君まで危ない人になりたいのかい

離島の墓場で  
二人だけで暮らすのもいいんじゃないね



ひとりぼっちの神様みたいだね」って  
クラスメイトに超遠回しに言われて  
せめてはっきり言ってくれれば  
ここまで傷つかなかったのに

皆が帰った後の教室で  
持ちこんだマンガ読んでたら君が来た  
「86ページ」って答えて  
急いでバッグに戻して早足で去った  
ページ数以外に何を言えば  
この気持ちを説明できたのか



いつからかちょちょこと

視界に入るようになったカメレオン

あるとき君は

「あなたの上に乗ってもいいかな」って言った

またあばらの中で心が碎ける事が

その音が怖かった

君を頭に乘せて

3階の窓の外にでも落とそうか？

僕は神も仏も信じてないぜ

本当にいいの？



チリ毛と果てしなく歪んだ性格で  
皆近寄らないばかりの僕を  
公園に行くたびに職質コンビニで  
何もしていないのに捕まる僕を  
本当にいいの？

うなずいた小さなカメレオン



ああ僕はそれさえも  
君が単にメンヘラ見つけて  
面白がってる気がして  
珍しい赤い毒キノコ見つけたなんて  
心底笑ってる気がして疑って

小さな小さなカメレオン  
僕をじっと見つめる



「あたし86ページ  
今でも覚えてるよ  
レールの後をずっと周りの色にとけこんで  
ついてきたんだ  
あなたは知ってると思うけど  
小さい頃から

あのとき声をかけて  
あなたが誰かの仲間に入れないなんて  
わかってるから  
せめてなぐさめてあげようとしたのに」



わかってるんだろ

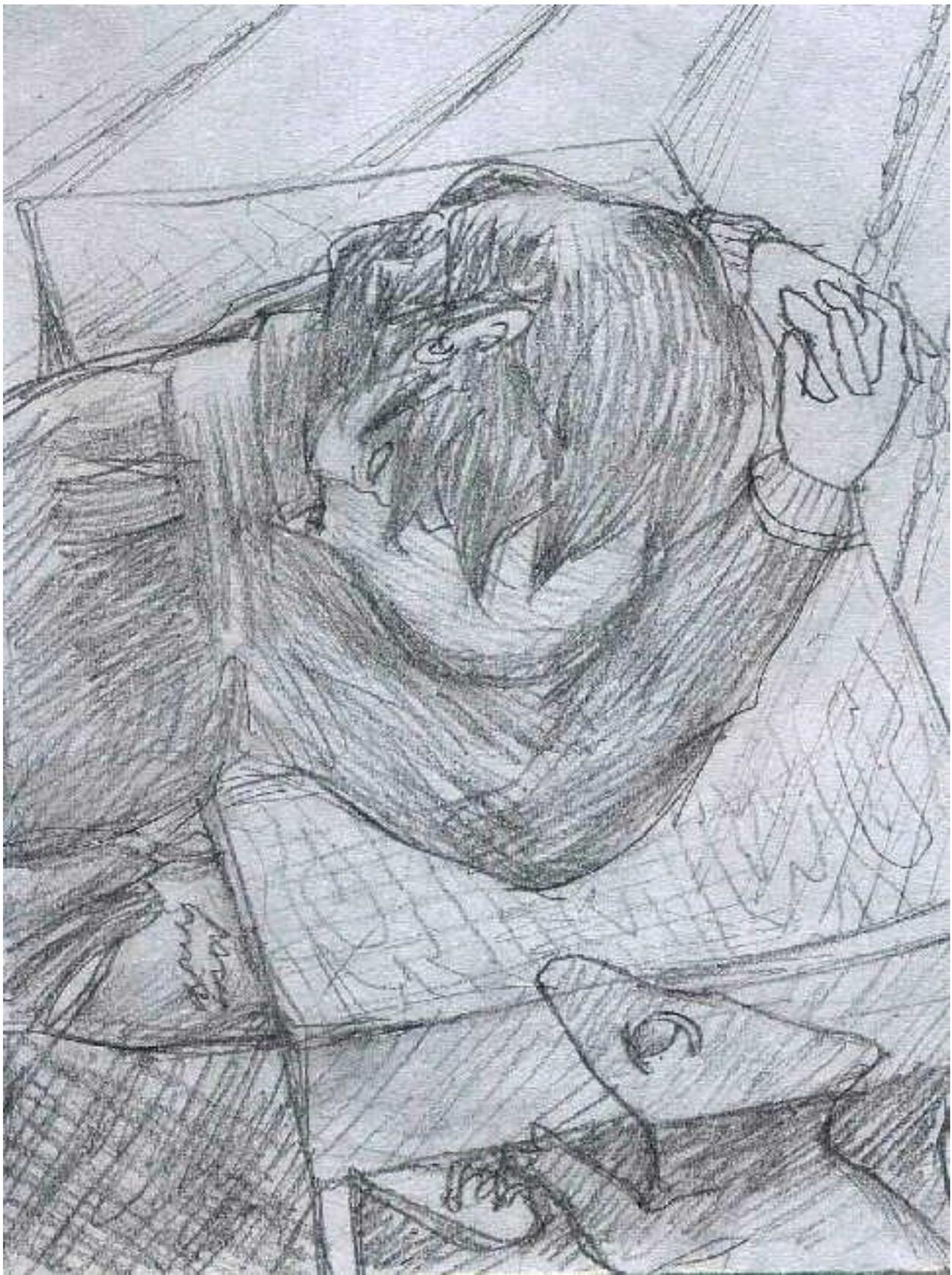
わかってるんだろう

僕は別にひとりでいるのが

クールだと思ってしまったナルシストじゃなくて

よく言えるよな

またつぶされたいかい？

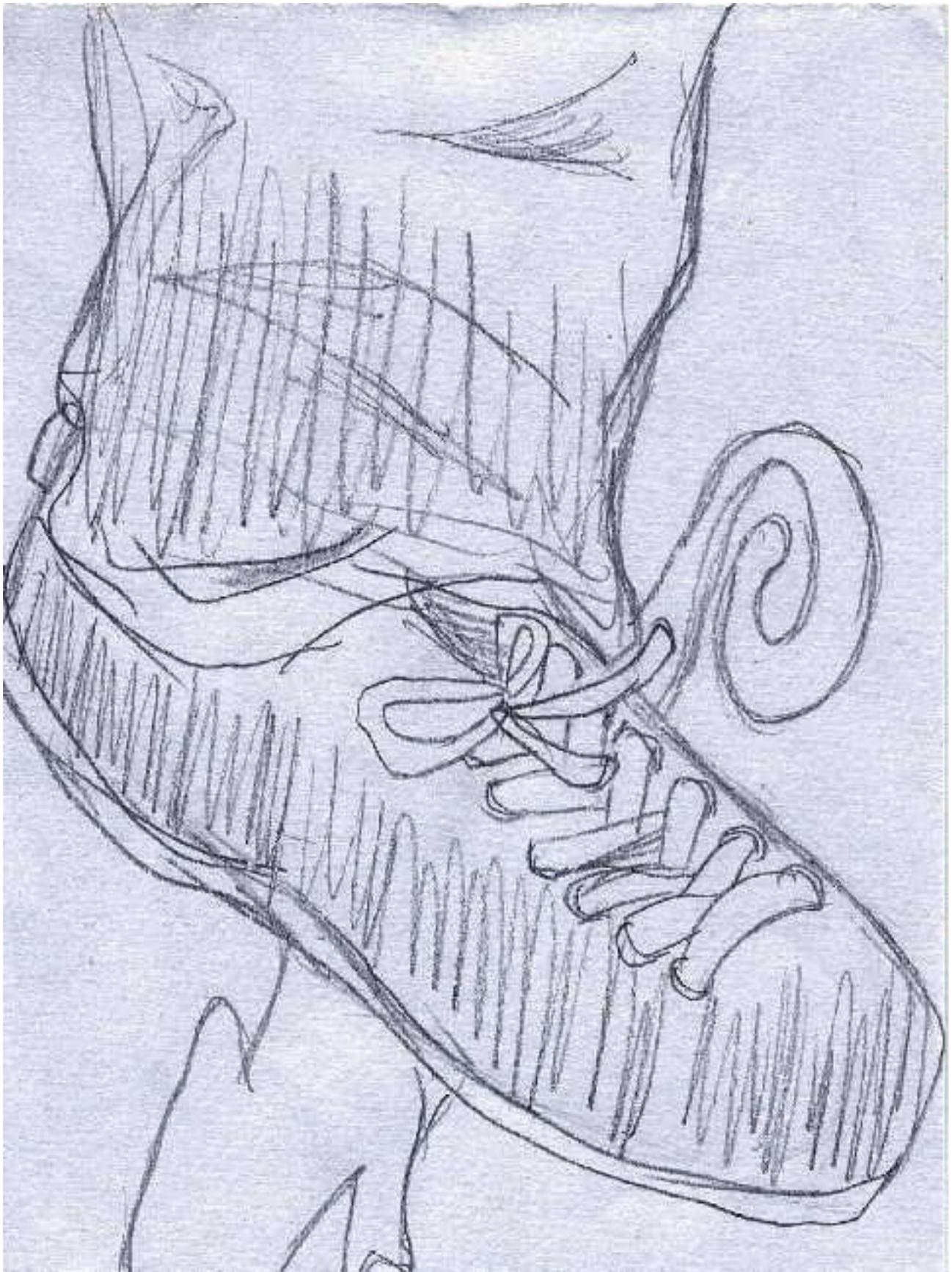


「でもあなたはそれを後悔してきたでしょう  
ずっと毎日毎晩の様に  
何かをつぶす事を  
生きるため食べるためにつぶすのでさえ  
人間辞めたいって思ってたでしょう  
他のニコニコして蚊をつぶす  
自称正義の人たちと違って  
そこまで思いつめてきたでしょう  
つぶすたびに  
それにあなたのくせ毛  
あたしは好きなんだ」



僕はもうバレバレの慣れた上向いたフリして  
君をまたつぶしてしまった  
足で何度も怒りを集めてきて  
踏みにじった  
傷ついてボロボロになった  
僕のカメレオン

「大丈夫 顔をあげて  
カメレオンはそんな事では死なないよ」



あなたはあたしに気づいていたでしょう  
ずっとずっと本当は前から

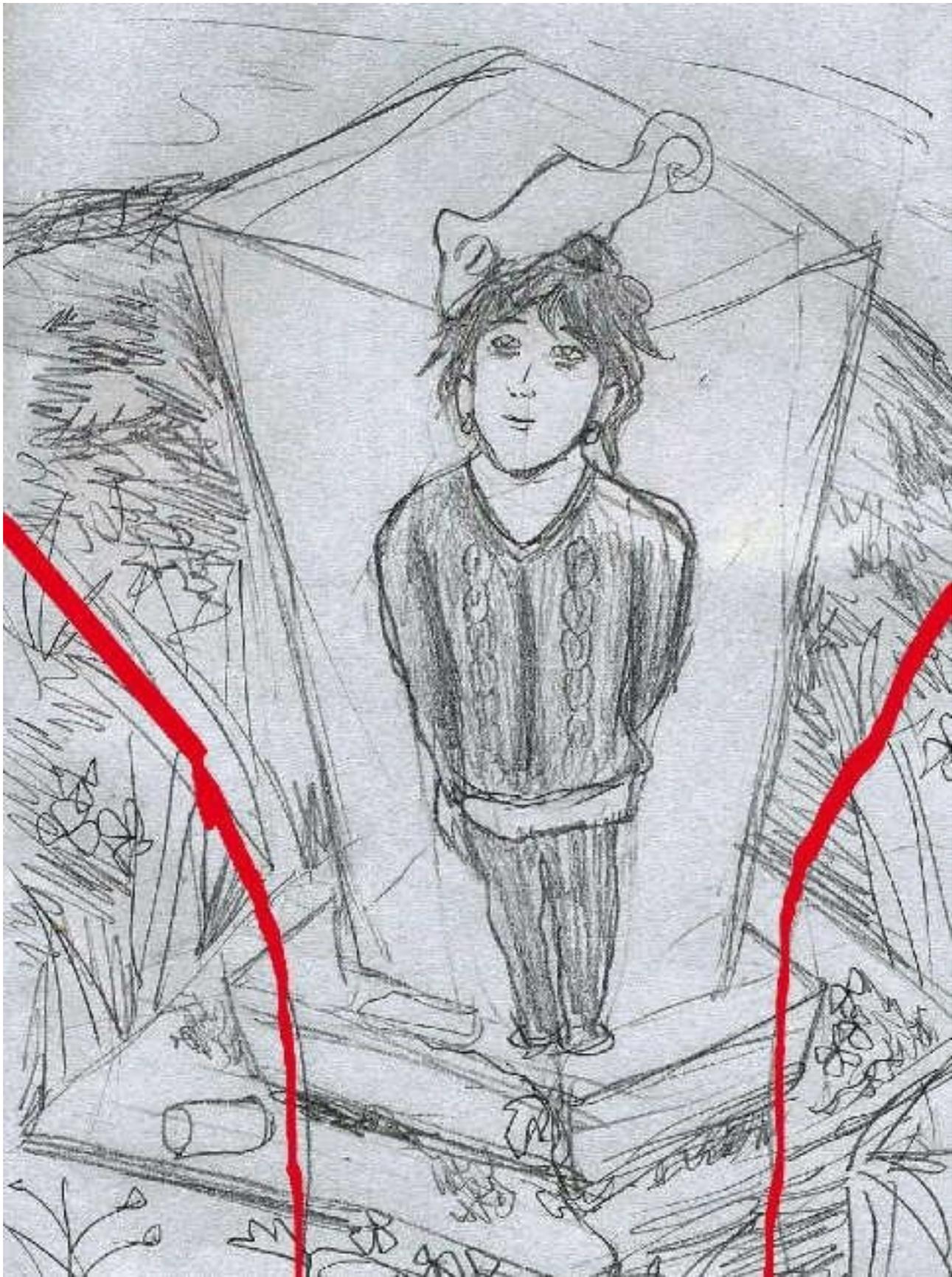
あなたがあたしを待ってた事  
知ってたよ



小さな小さな僕のカメレオン  
どこにいるのか行ってしまったのかな  
まあどうでもいいかって震えていた

何だ僕の上にいるのか

花も祈りも友達ももらえない墓  
君をもらえた離島の墓



## 離島の墓

<http://p.booklog.jp/book/110270>

著者：雨野 小夜美

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tinycolor/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110270>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/110270>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ